

アイコンタクト

★
看護職部門
入選

【福島県・沼崎美津子】

いくつになっても親は子どものごとが心配である。がんの終末期にある母親と精神疾患を持つ息子さんの訪問看護に就いていた時の出来事だ。

余命わずかな彼女は70歳を超えていた。トイレまで歩くのもやっとの母親は、息子に何もしてやることができない。息子さんは対人恐怖症のため、他人が家に入るとなると大変な騒ぎになった。

家としての営みが機能しなくなり雑然とした室内で足を踏み入れられる場所は、茶の間にある息子さんが座るこたつの座布団と、彼女の木枠のベッドとその周囲1畳ほどのスペースのみ。その間を息子さんが母親を案じて行き来する。私がそこを通ると息子さんは大声を出す。申し訳ない気持ちで彼女の居室へ行きケアを行った。

ある日、彼女の血圧を測っていた時、背後に何かを感じた。振り向くと、中の間を隔てた茶の間に息子さんの視線があった。彼女を見返すと、彼女も息子を見ていた。このベッドの高さと息子さんの

座高が、お互いの言葉のない「コミュニケーション」を結ぶたつた1つの導線だと察した。母親として息子に愛情を送っていた視線と、母親の安否を気遣う息子の視線が結び合う、かけがえない導線だったのだ。そう気づいた私は、度々転落する彼女のベッドを撤去しようと考えた愚かな自分を恥じた。その日は、ベッド脇に布団を敷き、転落しても大丈夫なようにして訪問を終えた。

3日後、庭に彼女のベッドが無残に放置された光景を見てがく然とした。遠くに住む親せきによつてベッドが撤去され布団に寝かされていたのだ。そのあくる日、彼女は逝つたと聞いた。母親と息子の命の線を断ち切られた瞬間を感じた。息子さんは取り乱し大声を出して入院となり、私の訪問は終了した。

あの「アイコンタクト」は今でも鮮明によみがえってくる。これからも命の絆の見えない線に感性を高め、看護を追求していこうと思う。